

第一四六話

千手丸殿元服事

『前太平記』下 卷第二十三 六三頁から六五頁より

【千手丸、名を頼義と改む】

長和二年九月、頼信朝臣の嫡男千手丸殿は、今年十一歳になられたので、元服をさせて差し上げようと言って、吉日を選ばれる。頼光朝臣は過ぎ去った寛弘年中に陸奥守になって、鎮守府将軍 (老) を兼任し、奥州にいらっしゃったが、任期を無事に終え、都に帰り、摂津守になって多田の御邸宅にいらっしゃった。長男頼国朝臣を始め、子息は多くいらっしゃる。次男頼家、三男頼基、次は永寿阿闍梨、その次は頼昭と言って、四天王寺 (式) の長である。女の子は一人いらっしゃった。二位済政卿の妻となられる。しかしまだお孫と言える者はいなかったもので、千手丸殿がしっかりご成長なさるのを、父母以上ちとてもお慈しみになって、すぐにご自分の元にお呼び申し上げ、元服させなさる。頼義とお名付けになり、お喜びは格別と噂された。

〔頼義、年少にして武名を揚ぐ〕

(頼義は) その後摂津守頼光朝臣が上洛の時に、共に連れ立ちなさって参内し、除目 (参) が行われて、正六位上の兵庫允 (肆) となられる。同年の冬、賀茂神社 (伍) ・石清水八幡宮 (陸) の両社に行幸があったときに、兵庫允頼義は初めてお供をされた。それゆえ名を世の中に示し、武家の棟梁となられるべきそのことはもはや

されば名を天下に顕はし、 武家の棟梁と成り給ふべき其機既に顕れ、

知られ、まだ幼い頃から武芸に精通して、多くの人の耳目を驚かすことは数度に渡

未だ幼稚の比よりも、弓馬の芸に精しくして、 万人の耳目を驚かす事数度に及べり。

った。中でも長和三年五月、関白道長公の御邸宅の京極殿 (漆) へ行幸があった。

前々から行幸 (への同行は) 度々であったが、ある時は歌の名人をお招きして詩歌を献上し、ある時は伶倫 (捌) のような名人が舞のための雅楽を奏で、色々な遊びなどでであったが、今回は競馬と騎射を準備し、叡覧に備え申し上げられるべしと言

今度は競馬・騎射を結構し、 天覧に備へ奉らるべしとて、

って、在京の武士の中でも弓馬の名人を選ばれた。すぐにその日になってしまった

在京の武士の中にて弓馬の達者をぞ撰ばれける。

ところ、最初に十番勝負の競馬を組み合わせられたところ、その出立ちは皆絞り染めの金襴 (玖) を半臂 (拾) とし、金・銀・真珠・玉で馬具を飾り、それぞれの生涯一の晴れ舞台として身支度したくらいで、御殿の内・階の下にまで一面に輝き、本当

に滅多にない壮大な眺めである。すぐに競馬は終わって、優れた射手を揃えて射芸が交代で行われた。兵庫允頼義は、伯父の頼光朝臣と階下に並んで座って見物して

階下に並み居て見物してを坐しけるを、

いらっしゃったが、道長公が御殿の上を通り過ぎかねて、少しの間立ち止まり、

道長公堂上を過ぎがてに

暫く立ち留どまり、

(頼義を) じっと見つめて、「兵庫允」とお呼びになる。頼義は(道長公のお近く

熟々と打ち守りて、

「兵庫允」と召す。

頼義

の) 階下に、すっにご参上になる。殿下が仰ったことは、「お前は仮にも満仲の孫

御階の下に、

つと参り給ふ。

殿下仰せけるは、

「汝苟も満仲が孫として、

として、代々武芸の家に生まれ、祖先からの生業を受け継いでいる。幸いにもこの

代々弓馬の家に生まれ、

箕裘の業を継げり。

幸い斯かる

ようなときに一矢を射たのであれば、誉であろう。承ってみてはどうだ」と、戯れ

時節に一矢射たらんは、

甚だ眉目たるべし。

仕りなんや」と、

戯れながら

ながら仰ったところ、頼義は辞退するような様子もなく、袖を寄せ合わせ、「承知

宣ひけるを、

頼義辞退の色も無く、

袖搔き合はせ、「承りぬ」と

いたしました」と申し上げられた。頼光朝臣はこの様子をご覧になって、「勇まし

ぞ申されける。

摂州朝臣は此由を見聞し給ひて、

「勇々しく

くお引き受け申し上げられたのは、非常に嬉しく、またいつも小鷹狩や犬追物をさ

御請け申されしは、

よにも嬉しく、

又常に小鷹狩り、大追物射させては、

せては、人並み以上にも勝れていたが、これは滅多にない晴れ舞台である。元から

人並みにも勝れたりけれ共、

是は有り難き晴れなり。

素より

幼いので、腕前はまだ確かではない。射ち損じたならばどうしようか」と喜びも心

少ければ、

拳末だ固まらず。

射損じたらば如何せん」と、

嬉しさも

配も混ざって、あれこれ心配に思いなさるのは本当に当然と思われた。すぐに（頼

覚東なさも取り接へて、

心苦しく思ひあつかひ給ふは最理とぞ覚へける。

光が）自ら頼義の直垂の露（拾老）を結んで肩にかけさせ、襟元を引き立たせ、鬢（拾式）を撫でるなどして、「十分に注意して気遅れするな。慌てては射ち損じるものだ

「相構へて臆なしそ。

心早りては射損ずるものぞ

ぞ」と、丁寧に言い含めて、従えていた加藤景通に弓と矢をお取り寄せさせ、左右

と、

苦ろに云ひ含めて、

の手に持ち、静かにお出になる。その顔立ちは本当に上品に見えたのだった。三条

其骨柄、誠に艶しく見へにけり。

帝・東宮・皇太后・内親王・中宮・皇后が、皆宸殿に御簾を垂れ、公卿・殿上人は東西の庇に幕を引き絞って、ざわざわとする声が広がっていらっしやる。階下は諸官や諸国の受領が、片膝を立てて並んで座っているが、頼義は少しも気後れした様

頼義些とも臆したる気色も無く、

子もなく、勝負の相手と立って並び、弓と矢を番え、矢の勢いも弦音もしっかりと

番の逢手に立ち合ひて、 弓と矢打ち番ひ、 矢色弦音逞しく、

し、的に少しもずれることなく、五度の勝負で十本の矢を射ちなさった。三条帝を

矢所少しも違はず、 五度の十をし給ひけり。

始め申し上げ、堂上・階下は驚いて、「射った射った」と感じ入る声がしばらく鳴り止まない。頼光朝臣はどうなるだろうかと、固唾を飲み、汗をかいていらっしや

撰州朝臣は如何あらんと、 固唾を呑み、 汗を流し坐しけるに、

ったが、このように勇ましくお成し遂げたので、喜ばしいとも言いきれな

斯く勇々しく仕成し給ひければ、 嬉し共云へば愚かにぞ成りにける。

いようになっちゃった。三条帝はご感心の余り、「今日の御遊で最も優れている

主上三条叡感の余り、 「今日の御遊の秀一なり」と、

ものである」と、非常に興に入りなさって、色々と褒美などを頂戴し、誉をお広め

甚だ興ぜさせ給ひつゝ

様々の禄共賜り、

眉目を施し

になった。

給ひけり。

注釈

※壺・鎮守府將軍……蝦夷を鎮圧するために陸奥に置かれた役所の長官。

※貳・四天王寺……現大阪府天王寺区の和宗総本山。聖徳太子創建とされる。

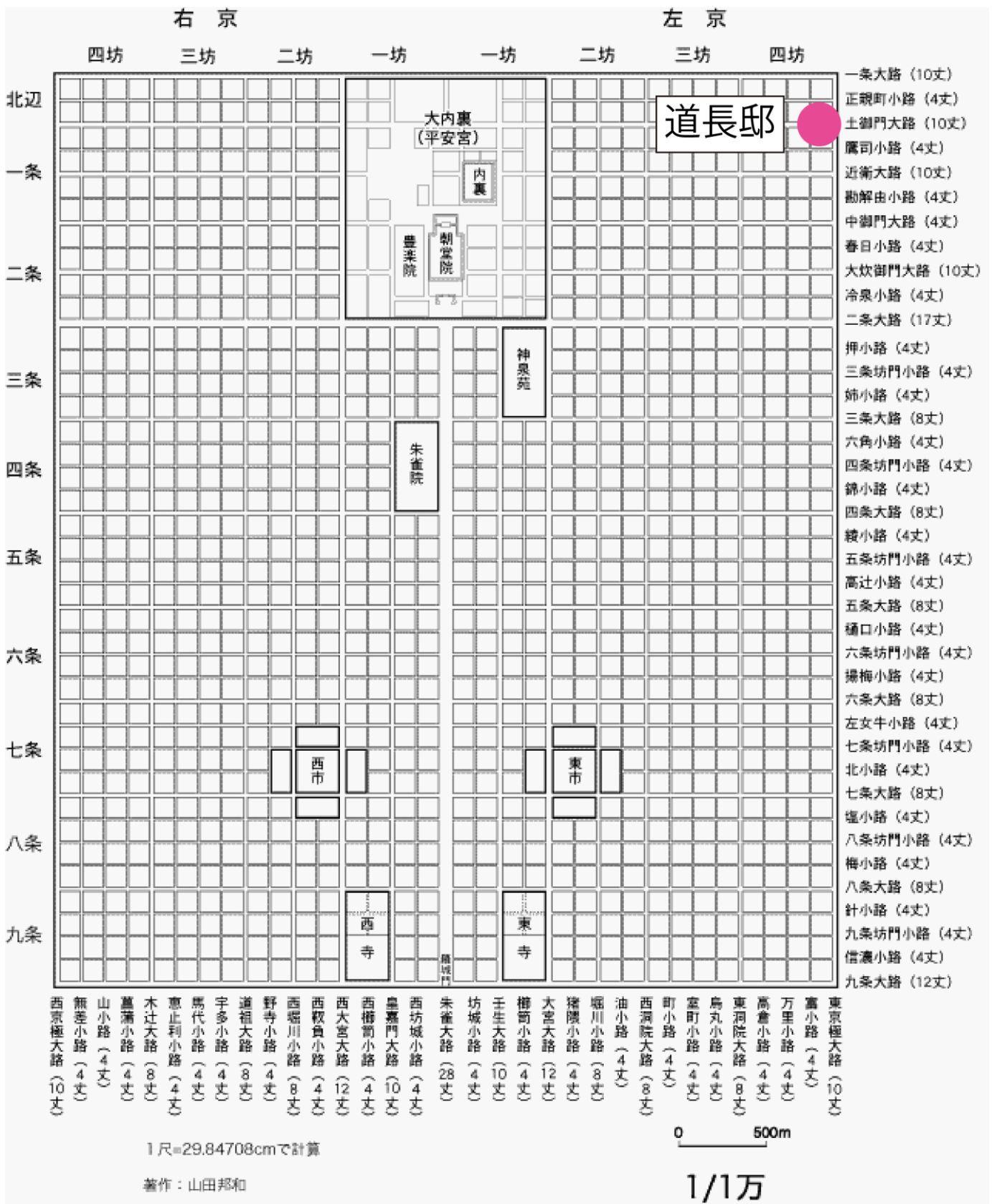
※参・除目……大臣以外の官職を任命する行事。

※肆・兵庫允……軍事一般を司る役所である兵部省の中でも、兵庫（兵器を納める倉）の管理をする役所の三等官。

※伍・賀茂神社……京都市の賀茂別雷神社（上賀茂）と賀茂御祖神社（下鴨）神社の総称

※陸・石清水八幡宮……京都府八幡市の神社。源氏の氏神。

※漆・京極殿……京都市の東京極大路に面する邸宅。藤原道長の邸宅は土御門大路に位置していた。下図参照。



※こちらの図は「平安京探偵団 (<http://homepage-nifty.com/heiankyo/>)」様より拝借し、加工いたしました。

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL (月下庵/<https://www.gekkaan.com/>) をご記載いただけましたらご自由にしていただいて結構です。※※※

※捌・伶倫……中国の伝説上の人物。音楽を司った。

※玖・金襴……金糸を織り込み、文様を表した織物。

※拾・半臂……袍（公的な場に出るときに着用する上着）の下に着る袖のない短い衣服。

※拾壹・露……狩衣・水干・直垂などの袖くくりの紐の垂れ下がった部分。

※拾貳・鬢……耳の上あたりの髪。

源頼義初めての晴れ舞台のお話でした。

今回のお話は、喜び、慌て、心配し、安堵するという今まで見られなかった頼光の人間臭さが見られて訳していてとても楽しかったです。

挑戦の志を見せる頼義はかっこよくて、もう余生と言える時を過ごしていた頼光の目には彼はどう映っていたのでしょうか。

訳者は、前太平記における頼光を、ただ「やれ」と言われたことや、危機に巻き込まれたことばかりで活躍した苦勞人だと思っています。本作の彼は自ら判断することのないあくまで「臣」としての頼光が、この物語の彼だと思っています。

自らの意思で前を見据えるその甥の姿は、輝かしく見えたのではないのでしょうか。

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m(__)m

公開：2021/7/20
海熊童子